〈青森県史〉の窓 192

ニュータウンとして始まった八戸のマチ

古舘 光治
（前是川縄文館館長）

現在の八戸市中心街。八戸町から三日町、十三日町方面を望む＝2021（令和３）年６月21日・筆者撮影

1627（寛永4）年、八戸根城の南部直義は盛岡の藩主南部利直の命により、いさかいの絶えない伊達領との境となる遠野への移封を命じられる。新たな藩都としての整備が進む盛岡にあった利直は、現在の下北半島から岩手県遠野・花巻地方までの広大な自らの領域再編を進める中での指示だった。

利直は、領主がいなくなった八戸支配のため、盛岡の支城として八戸城を築城して城代を派遣する。その場所が、現在の八戸市内丸にあたる。そして、この城の南側に新たな町場の建設を始める。

城から南に伸びる大手筋を境として、東側には八日町、十八日町、廿八日町が、大手筋から西側には三日町、十三日町、廿三日町が作られた。糠塚村と柏崎村の何もない野原に、新しい道と町が作られた。八日町側には新井田の商人に、三日町側には根城の商人に店を構えさせたといわれる。利直によるニュータウン建設事業といえる。

利直が八戸支配に際して、旧領主の居城である根城を選ばず新たな場所を選んだのはなぜか。城下町としての新たな機能を求めたからではないのか、その機能とは海運拠点ではなかったのかと私は考えている。

街づくりが進められた慶安年間（1648～52）の頃、盛岡藩では八戸で廻船の建造を積極的に進めている。造船事業によって船大工などの技術者が集められ、関連する木材や製鉄業の技術者も集まってくる。この港湾の充実による海運の発達が、物資の集積や交易に携わる商人の移住にもつながっていくことにもなる。

遡ってみると、利直は1617（元和3）年、領内有数の良港である田名部を、女性の領主であることを口実に根城南部家から取り上げたとされる。

さらに遡ると1593（文禄2）年に利直の父信直は、文禄の役（朝鮮戦役）の肥前名護屋（佐賀県唐津）の陣中から、下北を支配する八戸直栄に送った書状の中で、田名部や横浜、野辺地における造船や船の売り払いに触れている。南部氏はこの時点で海や湊、流通に対する関心を強く持っていたのではないだろうか。

現在の八戸市中心街には建物がたくさん建って遠くの景色を見通せないが、地形図で見ると中心街から湊にかけては緩やかな傾斜地になっている。今と違って、町場と湊の間に遮るものがなかった江戸時代の初め、新たな町場からは湊の風景を見下ろすことができた。逆に、馬淵・新井田河口の川口湊からは、八戸城の場所が見えていたはずである。根城からでは海を臨むことはできない。

南部利直は、広い領内再編の中で、野辺地や田名部より盛岡に近い立地条件を持っている八戸を新たな海の拠点として考えていたのではないか。そこに根城から内丸への拠点変更の意味があったのではないかと私は考えるのである。

根城南部氏の遠野移封の背景には、伊達領の抑えだけではなく、藩内全域における港湾に対するプラン、その適地である八戸の取扱いの意味も含まれていたのではないかと思われてならない。そのニュータウンへの動きが始まってから、もうすぐ400年となる。

『東京と青森』641号
東京青森県人会 2021年9月